資料２

国特有の安全文化フォーラムへの参加報告

令和６年１月24日
原子力規制庁

１．趣旨

本議題は、令和５年12月14日～15日に東京で開催された経済協力開発機構／原子力機関(OECD/NEA)の国特有の安全文化フォーラム(Country-Specific Safety Culture Forum、以下「CSSCF」と言う。）への参加結果について報告するものである。

２．結果概要

本CSSCFには、原子力事業者約70名、原子力規制委員会・原子力規制庁約20名のほか、地方自治体、海外の規制機関等からの参加者を含め全体で約120名が参加し、これまでのCSSCFの中で最大規模。原子力規制委員会からは山中委員長が開催挨拶を述べるとともに、伴委員が２日間にわたって参加した。原子力規制庁からは幹部職員から若手職員まで多様なメンバーが参加した。なお、参加者は、忌憚のない議論ができるよう個人として参加することとされ、所属組織名を述べることや参加者間での名刺交換も控えることとされた。

オープニング及びロバート・キャンベル氏による講話「日本について」に続き、個別セッションが行われた。個別セッションでは、原子力発電所での事業者内のやり取りや、事業者と規制機関とのやり取りに関する１０の場面についてロールプレイが行われ、それぞれの場面について、安全文化の観点からどのような気づきがあるかといった観点から、小グループでの議論が行われた。

最後のまとめセッションでは、地方自治体からの見解や海外からの視点として、英国、韓国、中国、米国からの出席者による気付きの点が共有された。クロージングでは、参加機関の代表者から挨拶があった。

なお、オープニング及びクロージングは公開で行われた。

３．議論となった日本の文化的な特徴や気付き

本フォーラムで議論となった主な日本の文化的な特徴や気付きの例としては以下のものが挙げられ、実効ある安全文化の育成・維持を行うために個々人がこうした点を意識して業務に当たることが大事であるとの認識が共有された。

- 規則遵守、勤勉さ
- 褒める文化、互いの尊重
- 情報共有の文化

- 権力勾配、上意下達、階層構造、年功序列
- 前例踏襲、現状維持、保守的、多様性の欠如
- 同調傾向、暗黙の了解
- 本音と建て前
- 敬意、落ち着き、静か
- 役割分担とコンセンサスを重要視

４．今後の予定

本フォーラムでの議論から得られた知見は、OECD/NEA が、事前のインタビューを含めた独自の分析結果と合わせて報告書としてまとめる。報告書は 2024 年中に日本語と英語で発行される予定である。

原子力規制庁の参加者からは、当庁の組織文化、安全文化について考える良い機会を提供するものであったとの声が多くあった。本年３月には OECD/NEA から、本 CSSCF 報告書とは別に、CNRA の活動として、安全文化に関する規制機関と事業者との相互影響やリーダーシップに係る報告書も発行される予定である。今回の経験やこれら報告書を踏まえ、原子力規制庁としても今後の活動に活かして行きたい。

以上

＜参考＞

参考１　第２０回原子力規制委員会（令和５年７月５日）資料５　国固有安全文化フォーラム（CSSCF）日本開催への参加

参考２　国特有の安全文化フォーラム（CSSCF）のこれまでの開催実績

資料５

国固有安全文化フォーラム（CSSCF）日本開催への参加

令 和 ５ 年 ７ 月 ５ 日
原 子 力 規 制 庁

１．趣旨

経済協力開発機構／原子力機関（OECD/NEA）から原子力規制委員会に対し、本年１２月に日本で開催される国固有安全文化フォーラム（Country Specific Safety Culture Forum、以下「CSSCF」と言う。）への参加要請がなされたことから、CSSCF の参加に係る対応方針の了承について諮るものである。

２．CSSCF の概要

CSSCF は、OECD/NEA と世界原子力発電事業者協会（WANO）との共催により、各国の国民性が原子力の安全文化、原子力施設の安全な運用にどのような影響を及ぼすかについて、参加者によるロールプレイ（役割演技）とそれに基づく議論により考察することを目的とするフォーラムである。これまでに、スウェーデン、フィンランド、カナダで開催されている（別紙１参照）。

フォーラム開催に先立ち、NEA 事務局は、事業者及び規制当局の様々な階層の関係者にインタビューを行い、それを基にロールプレイのシナリオを作成する。フォーラムでは、事業者及び規制当局からの参加者は、当該シナリオに基づいたロールプレイを行い、その後、その内容に基づいた小グループによる議論及び全体討論を行う。フォーラムにおける議論の結果は、インタビュー分析結果と併せて国民性の観点から分析がなされ、OECD/NEA の報告書としてまとめられ公開される。

日本で開催予定の CSSCF には、事業者及び規制当局の他、海外の規制当局、我が国の原子力発電所が立地している自治体からも関係者の参加が予定されている。また、オープニングセッション、クロージングセッション等は公開で行われ、ロールプレイ、小グループによる議論及び全体討論は非公開で行われる予定（別紙２参照）。

３．CSSCF の参加に係る対応方針（了承事項）

以下のとおり、原子力規制委員会及び原子力規制庁が CSSCF に参加する方針について了承頂きたい。

・山中委員長のオープニングセッションにおける挨拶
・伴委員の参加とクロージングセッションにおける挨拶
・原子力規制庁職員の参加
・NEA 事務局により開催される準備会合への原子力規制庁の参加

以上

＜別紙＞

別紙１　国固有安全文化フォーラム（CSSCF）のこれまでの開催実績（添付省略）

別紙２　国固有安全文化フォーラムの日本開催について

国固有安全文化フォーラムの日本開催について

NEA
NUCLEAR ENERGY AGENCY

原子力安全文化は、「原子力施設の従業員やその組織における職場・個人・地域の安全に対する信念・概念・価値観を集約したもの」と定義されるのが一般的です。組織における健全な原子力安全文化が原子力施設の効果的・持続可能な運用をもたらすとの考えから、OECD 原子力機関（NEA）と世界原子力発電事業者協会（WANO）は共同で「国固有安全文化フォーラム（CSSCF）」を開発し開催してまいりました。

2018 年 1 月にスウェーデンで開催された国特有安全文化フォーラムの様子

CSSCF は、各国の国民性が原子力の安全文化、ひいては原子力施設の安全な運用にどのような影響を及ぼすかについて対話し、振り返りを行う場を提供することを目的としています。

NEA と WANO は、これまでにスウェーデン（2018 年）、フィンランド（2019 年）及びカナダ（2022 年 9 月）において、合計 3 回のフォーラムを実施しました。これらフォーラムにおいては、各国の原子力関係機関の専門家やシニアリーダーを集め、原子力安全文化がその国固有の文化的背景によって如何なる影響を受け得るかについて理解を深め、意見を交換する場を提供してきました。各国での CSSCF で得られた主要なな知見は、当該国の原子力安全文化の強化に貢献して参りました。

日本での CSSCF は 2023 年 12 月に開催する予定です。これは、原子力規制委員会（NRA）および電気事業連合会（FEPC）の協力を得て NEA が計画し WANO 東京センターと共に開催するものです。

このプロジェクト全体は、一連の目的を持ったステップから構成されており、まずは NEA 専門家による原子力関係者に対するインタビューから開始されます（2023 年 5 月実施）。本データ収集においては、経営陣から現場作業員に至るまで組織内のあらゆる階層を対象に実施し、それを「スナップショット・スタディ」として取りまとめます。この調査結果をもとに、2023 年 12 月に開催予定のフォーラム（2～3 日間）で活用するためのナリオを作成します。このシナリオは、原子力発電所の運営で実際に起こった事象に基づくものであり、フォーラムにおける参加者の間で議論を活性化するために活用されるのです。当日は、海外からの多数のオブザーバーも参加する予定です。

フォーラムにおける議論の結果得られる知見は、事前に実施したインタビュー分析結果とあわせて網羅的な最終報告書としてまとめられます。この報告書は、確認された国民性、そして国民性が原子力安全文化に及ぼす影響について記述し、日本の原子力安全文化を強化するための積極的な取組を明らかにします。本報告書は日本語版と英語版の両方で発行される予定です。

CSSCF は、原子力安全文化が日本の文化的背景から如何なる影響を受けるかについて検証するための効果的な手法となります。フォーラムよって、国内の原子力事業者、原子力産業界、規制当局、その他国内外のステークホルダーの参加者間で開かれた対話が促進されます。その目的は、注目に値する諸課題、、既存のベストプラクティス、過去の教訓から学んだこと等についてハイライトを当てることを目的とするものです。

2022 年 9 月にカナダで開催された国特有安全文化フォーラムの様子

本フォーラムにおいて、参加者が協力的で自由な意見交換を行うことを通じて、日本の原子力安全文化にプラスの効果をもたらすことを期待します。

お問合せ先:

メール: nea@oecd-nea.org
公式サイト（英語）: www.oecd-nea.org/csscf

OECD/NEA公表資料

参考２

国特有の安全文化フォーラム（CSSCF）のこれまでの開催実績

第１回

場　所：スウェーデン・ストックホルム

開催日：２０１８年１月２３～２４日

参加機関：ＯＥＣＤ／ＮＥＡ、ＷＡＮＯ、発電事業者、燃料関連事業者、スウェーデン放射線安全機関（ＳＳＭ）、フィンランド放射線・原子力安全局（ＳＴＵＫ）、原子力規制委員会（ＮＲＡ）

結果概要：フォーラムにおいて、スウェーデンの文化的な側面が説明され、ロールプレイ、議論が行われた。スウェーデンの「samskap（統一されていること、合意されていること、良好な関係を保つこと）」、「allskap（公正、公平）」、「自由」、「共通の理解と信頼」という文化的側面は他者への配慮を示し、安全文化の強化に寄与する。階層的にリーダーシップをとることやマイクロマネージメントをすることは適切でないと捉えられていること、マネージャーが全体を把握することが出来ず、指揮能力を失うリスクもあるとの議論があった。

第２回

場　所：フィンランド・ヘルシンキ

開催日：２０１９年３月６～７日

参加機関：ＯＥＣＤ／ＮＥＡ、ＷＡＮＯ、発電事業者、燃料関連事業者、ＳＴＵＫ、イギリス原子力規制機関（ＯＮＲ）、ＮＲＡ等

結果概要：フォーラムにおいては、フィンランドの文化的な側面が説明され、ロールプレイ、議論が行われた。フィンランドの文化的側面である「信頼」、「技術的厳格さ」、「解決型アプローチ」、「自主性」、「平等」等により、職員は組織内でオープンかつ自由に発言ができる。各個人の技術的能力が過大評価されていた場合、問題が生じる可能性があるとの議論があった。

第３回

場　所：カナダ・オタワ

開催日：２０２２年９月７日～８日

参加機関：ＯＥＣＤ／ＮＥＡ、ＷＡＮＯ、発電事業者、燃料関連事業者、カナダ原子力安全委員会（ＣＮＳＣ）、フランス原子力安全機関（ＡＮＳ）、スイス原子力規制機関（ＥＮＳＩ）、ＯＮＲ、ＮＲＡ等

結果概要：フォーラムにおいては、カナダの文化的な側面が説明され、ロールプレイ、議論が行われた。カナダの文化的側面である「礼儀正しさ」、「上下関係の尊重」は、ある領域では少し問題となり得るし、補うべきところでもある。争いを避けることはカナダの文化の１つだが、例えば社外の独立した人を雇って仲裁に当たらせるなど、その影響を軽減するための手段も検討できるかもしれないとの議論があった。